

天職論を考える

Rotary の標準クラブ定款、五大奉仕部門 2 の「職業奉仕 (Vocational Service)」を読むと、勿論、「高潔性や高い倫理基準、職業専門性を活かした奉仕」が見受けられるが、明らかに「天職論」と思われるフレーズがある。どこを指すかと言うと「品位ある業務はすべて尊重されるべきであるという認識を深め、あらゆる職業に携わる中で」の部分である。なるほど、そもそも Rotary club は多様な職業人の集まりであるし、地域社会に依存したクラブごとの多岐に亘る（現在は廃止だが）「職業分類」というものがあったから、「天職論」はそのことの繋がりがあのだと容易に想像できる。

話は逸れるが、Rotary が団体奉仕ではなく、人生道場の例会を通じ自己研鑽した個々の Rotarian が、実社会にそれぞれの立場で個人奉仕をしていく方が奉仕の拡がりがあるというのも頷ける。

ロータリーの目的の前文の原語（英語）にも、相当数の「仕事」を表す Word がある。ところが日本語に訳すと、「仕事」とか「業務」とか具体性に掛けるから、（英語圏は多様な文化・人種の集まりだから具体性、我が国は単一民族の日本独特の察する文化が邪魔をする、とかはここでは置いといて）職業奉仕をフアジーな捉え方しか出来ず、解釈を難解にしていると聞いた事がある。

ちなみに、先の「The Object of Rotary (ロータリーの目的)」に出てくる仕事を指すであろう Word は、business、profession、occupation とあり、その他、私が個人的に思い付く仕事は、一般的な言葉として work、job 等もある。

そんな中、Rotary の発祥はアメリカで、Rotary の生みの親、ポール・ハリスの価値観も影響大で、そのポール・ハリスの育ての親、祖父母が敬虔なクリスチャンであった事も見逃せない。慌てて、キリスト教における天職論を AI で調べてみた。するとこのような答えが出た。

「職業を神から与えられた神聖な使命と捉え、日々の労働や生活のすべてを通じて神に仕えるという思想」とあり、さらに起源と発展には、宗教改革者マルティン・ルター（小生が会長職の時に「木を植える人」の話を引用したのはここでは触れない）の話がこのように載っていた。「修道士のような特別で世俗から離れた場所での奉仕だけが尊いという見方を否定。神が一人ひとりに与えた世俗内の職業 (Beruf (独語) : ベルーフ : 天職・使命) こそが天からの召命であると説いた」、「神の使命 (コーリング) として、天職とは“神に召された”職業を指し、自分の欲望の為でなく、隣人愛 (隣人に仕える) と神の栄光の為に働く事と定義」、「プロテスタントの倫理として、ジョン・カルヴァンは、その仕事に邁進し、結果として富を成す事は神の恩寵の証とし、この考え方が勤勉な労働と節約を美德とする“世俗内禁欲”を育て、資本主義の発展に大きな影響を与えた」、「日常の全てにおいて、“天職”とは仕事だけに留まらず、家族生活や家事、子育て等、日々の生活の全ての役割が含まれる」とあった。結びに「この思想は、働く事を自己実現や神への奉仕として肯定し、どのような職種であれ誠実に行う事に宗教的な意味を見出す姿勢を生み出した」と。

Rotary は発祥が発祥だけに、なるほどそうだと思いますながら、余談ではあるが、

以前、セミナーで「寄附行為は、キリスト教圏では、（神との対峙が人生の主なので）商売で儲ける事はNGだからその免罪符の意味合いがあった」と聞いた事を思い出した。

この価値観を日本に持ち込んだ米山梅吉翁は当時どうだったのだろうか？と100年前に思いを馳せる。ここで「日本人に職業奉仕とは何なのか？」という説明をするにあたり、解り易いエピソードがあったので紹介をする。自分が会長職の時の移動例会（宿泊を伴う移動例会の場所を決定するのは我がクラブでは会長の専権事項）で米山梅吉記念館に訪問した時の話だ。記念館のサーキュレーターとおぼしき女性の方が記念館の隅から隅まで説明を頂くのだが、米山梅吉翁が三井信託の社長をしていた時のエピソードを教えてくれた。記念館のパネル展示には載っていない話だ。それは次の通り。

「米山梅吉は、三井信託の若手行員に次の英文が入った名刺入れを配った。その言葉は“Keep your name clean”である。直接に訳すと“自分の名前を綺麗に”であるが、上手に訳す人が居て、“自分の名に恥じない仕事を”だそうで」。

ここから先は私の私見である。単一神であるキリスト教圏の欧米と違い、八百万の神の我が国では、“自分自身と向き合う姿勢”を問うた方が効果はあると梅吉翁は思ったのでは？と、勝手に想像して、何だか職業奉仕が腑に落ちた感があって、ほくそ笑んだ。

最後に、私の天職論・職業観を紹介して話をこの終わりにする。

私が経営する店には、武者小路実篤直筆の書があるのを、以前にこのそれぞれの職業奉仕の別の文章で二つ紹介した事があった。もう一つあったのを忘れていた。その書はこのような内容である。

「この道より我を生かす道なし この道を歩く」

意味としては、「自分自身の人生を歩む事、自分の信じる道をひたすらに進む事」を指し、人間形成の核心や生き方そのものを表すものだそう。「この道」の解釈は、「唯一無二の道として、他の道ではなく、自分に与えられたこの道こそが自分を成長させ、生かす道であるという強い決意」、「自己実現として、他の誰でもない“自分”が歩むべき道を、主体的に選んで進むことの重要性」、「人生の哲学として、困難があっても（わが行く道に茨多し）、生命（いのち）の道は一つであり、それをひたすらに歩むという力強いメッセージ」とあった。実篤の事を知らなくともこの言葉に共感し、座右の銘として掲げる方がいまでも絶えないと聞いた事がある。

「金さえ儲ければ」という世知辛い世の中で、多くの天職を持った職業人で構成される Rotary に於いて、仲睦まじい仲間に関わられながら職業を通じ自分の人生を考える事、また、職業を通じ社会に関わっていく事は、それこそ「Rotary の実働である」と今回の地区事業「それぞれの職業奉仕物語」で考えさせられた。